

平成 25 年 8 月 8 日

西脇市長
來住壽一 殿

一般社団法人 日本建築学会
近畿支部支部長 小坂郁夫

西脇小学校木造校舎の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、西脇市におかれましては、西脇市西脇 656-1 に位置する西脇市立西脇小学校の木造校舎を解体・改築する計画である由、新聞の報道等にて聞き及んでおります。

当該校舎は、兵庫県教育委員会が 2006 年に発行した『兵庫県の近代化遺産』に掲載されており、2008 年には兵庫県の景観条例に基づく景観形成重要建造物にも指定されているなど、その高い歴史的文化的価値が、すでに広く公に認められているものでありますこと、ご高承のことと存じます。

当該校舎は、1936（昭和 11）年から 1937（昭和 12）年にかけて竣工した 3 棟の建物から構成される木造建築で、壁面を下見板張りとしながら柱などを壁面に露出させたハーフトィンバー風のデザインを基調とし、一部にセセッション（ウィーン分離派）風や和風のデザインを取り入れた、大変特徴的で優れたデザインの建物です。また設計者の内藤克雄（1890-1973）は、戦前に播磨地方を拠点として活躍した優れた建築家であり、当該校舎は内藤の設計による残り少ない建物の 1 つです。この頃に建設された木造校舎で現存するのは数少なく、西脇市を中心とした播磨地域の歴史的・文化的価値を今に伝える大変貴重な建物となっています。

その建築の有する価値は別紙「見解」に記されたとおり、近代日本における歴史的建築としてかけがえなきものであります。こうした建物は、機能に応じた整備や構造体の補強によって長寿命化を図り活用していくことが、建築資源の有効活用の視点からも求められております。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、当該校舎の保存活用を図るための方途を積極的にご検討の上、推進されますよう、お願い申し上げます。

なお、本会はこの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

平成 25 年 8 月 8 日

西脇小学校木造校舎についての見解

一般社団法人 日本建築学会近畿支部
近代建築部会主査 笠原一人

・建物の概要

兵庫県西脇市西脇 656-1 に所在する西脇市立西脇小学校は、1873（明治 6）年、学制発布により現在の同市童子山公園の南側に開校した為祥小学校を前身とする小学校である。その後開性尋常小学校と改称され、1901 年（明治 34）年に同校を含めた 3 校が合併されて現在地へ移転した。その後 1917（大正 6）年に西脇尋常高等小学校と改称され、1937（昭和 12）年には木造の当該校舎に改築された。1942（昭和 17）年には西脇国民学校と改称、1947（昭和 22）年に西脇町立西脇小学校に改称、1952（昭和 27）年に西脇市立西脇小学校となって、現在に至る。

当該校舎は、木造 2 階建ての校舎が 3 棟並んで建つもので、1936（昭和 11）年に最南側 1 棟、1937（昭和 12）年に北側 2 棟が竣工している。延床面積は各棟 1,257 m²、3 棟の合計は 3,771 m²である（西脇市教育委員会のデータによる）。設計者は現在の小野市を拠点として建築家として活躍していた内藤克雄（よしお）である。

当該校舎は兵庫県教育委員会が 2006 年に発行した『兵庫県の近代化遺産』に掲載されており、2008 年には兵庫県の景観条例に基づく景観形成重要建造物にも指定されている。当該校舎が高い歴史的文化的価値を持ち、それがすでに広く公に認められていることを示している。

当該校舎は、竣工時と比べると、外観および室内ともに多少の改変は見られる。屋根は竣工当時より金属板葺であるが、貼り替えられている。下見板張りの壁面も内藤の発案により竣工当時からスレート板であったが、現在は異なるスレート材に張り替えられている。また室内の天井板などに変更部分が認められる。しかし当該校舎は、構造体や全体のデザインについては変更もなく、内装や建具も竣工当時のものが多数使われており、変更部分も全体のデザインや材質をほとんど損ねていない。全体的にはオリジナルの状態や特徴を大変よく留めていると言える。全国的に見ても、木造校舎が竣工当時の状態で使用されている例は少なく希少性が高い。

・建築デザイン上の価値

当該校舎は、外壁を洋風の下見板張りとし、柱などを壁面に露出させたハーフティンバ

一風のデザインを基調としている。だが、正面玄関のポーチやその上部、室内の階段の親柱などにセセッション（ウィーン分離派）風のデザインを取り入れ、また各教室や廊下は壁面を柱が露出した和風の真壁仕上げ、天井も和風の竿縁天井としている。また校長室や職員室、旧理化教室などは、壁面を長押風のデザインを備えた格式ある和風の表現とし、天井も格式ある折り上げの竿縁天井とするなど、室内は和風を基調としている。すなわち全体には、木造でありながら洋風と和風を混合し、さらに当時の最先端のデザインをも取り込んだ、大変優れたデザインであると言える。

校舎の配置にも特徴がある。教室を南側に配し北側に廊下を備えた棟が、間に緑地帯を設けて3棟並置され、互いに渡り廊下で結ばれている。渡り廊下は3棟の建物の中央部分を貫くものと、東西の両端にそれぞれ1つずつ、合計3つ設置されて建物全体を繋いでいる。したがって全体に大変明快な構成を持ちながら、各棟の移動の機能性も十分で、3棟が整然と配置され連結されて一体となることで、一つのまとまった景観を形成している。

・建築家内藤克雄の作品としての価値

当該校舎の設計者である内藤克雄は、1890年（明治23）年、現在の西脇市落方で生まれ、1908（明治41）年に神戸の兵庫県立工業学校建築科を優秀な成績で卒業した後、兵庫県土木部建築課に技手として勤務した。1914（大正3）年に現在の小野市内に内藤建築事務所を開設し、以来、1973年に亡くなるまでに、判明している限りで800件余りもの建物を設計した。

内藤は、現在の小野市を拠点に活動し、その作品はほとんどが兵庫県の東播磨地域および北播磨地域、また京都府の丹波地域に建てられており、地域に根差した活動を展開した。設計した建物の種別は公共建築や商業建築、住宅、社寺など多岐に渡るが、中でも公共建築が70%以上を占めたとされ、内藤の仕事の多くが公共的な建物であったと言える。当時はまだ兵庫県下で民間の建築家として活動した者は数少なく、優れたデザイン力を持ち、兵庫県建築課に勤務し公共建築の設計に精通していたことで、独立後に地域で信頼を得て、公共建築を中心に数多くの建築作品を残したと見られる。

西脇小学校木造校舎以外に、内藤の設計による現存する建物としては次のようなものが挙げられる。西脇市内には、旧西脇消防屯所（現・西脇市消防団第1分団本部／1935年竣工）、高瀬家洋館（1936年竣工）、旧来住家洋館（1936年竣工）が現存する。また西脇市外では、旧小野小学校講堂（現・小野市立好古館／1936年竣工）や旧柏原町役場（現・丹波市役所柏原支所／1935年竣工）などが現存している。いずれも、ほとんど西脇小学校と同じ時期に建設された、洋風のデザインを基調としながら部分的にセセッション風のデザインを取り入れた建物である。そこには西脇小学校にも共通するデザインが見られるなど、作風は一貫している。

こうした内藤による作品の中にあって、西脇小学校は、現存する最大規模の建物であり、

またデザイン的に見ても、最も優れた特徴あるものとなっている。そしてそれは、播磨地域で数多くの公共建築を手がけた内藤が設計した公共建築の 1 つであり、地域に根差した建築家である内藤の活動を象徴する作品として位置づけられる。

・西脇市の地域歴史遺産としての価値

西脇市はかつての多可郡の町村が合併して 1952 年に誕生したが、江戸時代より播州織に代表される繊維産業で栄えた由緒ある地域である。繊維産業は、明治時代からの近代化により自動化が進み、大正時代には織機に電力が導入されて生産量も拡大する。1937 年頃には播州地域で 1 万 6 千台以上の織機を保有するなど、1930 年代に戦前期の成長のピークを迎えたとされる。戦後も 1960 年代に輸出量が拡大し 1990 年代に至るまで播磨地域における繊維産業の中心地として栄えた。

こうした中で、播州地域が戦前期に最も栄えた 1930 年代を通じて、現在の西脇市内には近代化と西洋化、そして豊かさの象徴として洋風の建築が数多く建てられた。中でも西脇小学校は、洋風と和風を巧みに融合させ、また当時の最先端のセセッションのデザインをも取り入れたもので、時代性と西脇の繁栄を象徴する建物だと言える。そして現在でも竣工当時の姿をほとんどそのまま留めていることは、特筆に値する。こうした木造校舎は、全国的に見ても数少ない。西脇という地域の近代の繁栄ぶりを今に伝える極めて貴重な歴史遺産であると言える。

また前述のように、西脇小学校の設計者であった内藤克雄は、現在の小野市を拠点として、ほとんど兵庫県の東播磨地域と北播磨地域および京都府の丹波地域だけで建築活動を展開した地域に根差した建築家であり、公共建築を中心に地域の代表的な建物の設計を担当した。その内藤が設計した西脇小学校は、この地域ならではの当時の建築活動を象徴するものである。

加えて当該校舎は、周囲を山に囲まれた西脇市にあって、ちょうどその山並みと街との接点に位置し、3 棟の木造校舎が並んで建つことで、山並みと調和する美しい景観をつくりだしていることも特筆すべき点である。大都市にはない自然と共存する西脇市の特徴が存分に生かされた建物だと言える。

・期待される活用

前述のように当該校舎は、建物自体のデザインに優れ、かつ地域に根差した建築家の優れた作品であり、地域の近代化の歴史を語り継ぐ極めて重要な建物である。また、それがほとんどそのまま現存し、竣工時から現在に至るまで、学校建築として、当初の目的のまま使い続けられていることにも極めて高い価値がある。そこには、建物を大切に残そうとしてきた地域の人々の意志を感じることができる。このように優れた、そして地域で大切

にされてきた歴史的建造物が失われるようなことがあっては、西脇市はもとより我国にとっても大きな損失である。

文部科学省では、「木材を活用した学校施設づくり促進の取組」において補助金を出すなど、木造校舎を推奨している。また当該校舎など近代の建物は、修復や改修、補強などを行いながら活用し使い続けるのが、近年の潮流になっている。特に近年、解体寸前まで追い込まれた木造校舎が修復や改修、補強によって保存・活用されている成功事例がある。

例えば木造校舎の事例の一つに和歌山県橋本市にある橋本市立高野口（こうやぐち）小学校がある。この小学校は西脇小学校とほぼ同時期の1937（昭和12）年に竣工した瓦屋根を載せた大規模な木造校舎であるが、阪神淡路大震災を契機として、耐震性や安全性への疑問が呈され、解体・改築計画が生じた。しかし卒業生や地域住民、行政、研究者が一体となり、オリジナルの建物をほとんどそのまま残しながら、補強や改修を行うことで、現在保存・活用されている。この活動が高く評価されて、この建物は2013年の日本建築学会業績賞を受賞している。

また愛媛県八幡浜市にある八幡浜市立日土（ひづち）小学校は、戦後の1956年から58年に竣工した、いわゆるモダニズムのデザインによる木造校舎である。ここでも台風によって校舎の一部が損壊したことを契機として、建物の安全性に疑問が呈され解体・改築計画が生じた。しかし卒業生や地域住民、行政、研究者が一体となり、オリジナルの建物をそのまま残しながら、補強や改修、増築を行い、現在保存・活用されている。この活動が高く評価されて、この建物は2012年に日本建築学会賞業績賞を受賞し、また国の重要文化財に指定され、さらにアメリカのワールド・モニュメント財団によるモダニズム賞を受賞するなど、極めて高い評価を受け、メディア等でも全国的に報じられている。

兵庫県下でも、篠山市立八上小学校の木造校舎が2012年に耐震補強工事を行い、現在も校舎としてそのまま保存・活用されている。西脇小学校においても、耐震補強工事によって保存・活用していくことは、現実的に可能なはずである。

前述の高野口小学校や日土小学校の木造校舎は、現在ではいずれも、地域の観光協会でも大きく宣伝され、街の重要な観光資源としても位置付けられている。地域資産を活用することによってまちづくりを行い、町を活性化することも、一つの時代の潮流になりつつある。西脇小学校の木造校舎も、そうした可能性を十分に秘めている。

西脇小学校の歴史や当該校舎の文化財的価値の高さ、また現在に至るまで同校の校舎として使い続けられていることを鑑みて、今後も木造校舎の全体が保存され、活用され続けることこそが望まれる。むろん現状のままでは現代の生活や法令にそぐわない部分が生じるであろうことは想像できるが、それは補修および改修、補強などによって解決すべきである。その際にも、現在の建物を改築してイメージだけを残すのではなく、オリジナルの校舎の現物を残すことが望ましい。

多角的なご検討と叡慮により、歴史的、地域的特徴を備えた当該校舎の文化財価値の保存と活用が計られるよう切望するものである。

西脇小学校木造校舎の保存活用に関する要望書 添付写真 4 枚



西脇小学校 No.1 (撮影：笠原一人氏)



西脇小学校 No.2 (撮影：笠原一人氏)



西脇小学校 No.3 (撮影：笠原一人氏)



西脇小学校 No.4 (撮影：笠原一人氏)